

レンズを通して

連載「四月」

写真・文 高田宮妃久子殿下



ヒヨドリ

全長27.5cm ヒヨドリ科

主に日本と朝鮮半島に生息。

枝の間を豪快に動き回り、

桜の蜜を吸い、花びらを食べる。

嘴と顔に黄色い花粉がついているが、

特に虫の少ない時期に咲く椿や

梅などの花にとって、

鳥は大事な花粉の運び手。



メジロ

全長12cm メジロ科

蜜を好み、椿や梅、桜の花に集まる。

秋には熟した柿も好物。この日はヒヨドリに

警戒しながら、蜜を吸っていた。

日本、中国、フィリピンなどの平地や低山の森に生息。

繁殖期にはよく通る美しい声で囀る。

色とりどり

写真文 高田宮妃久子

最近、エディブル・フラワーが随分と普及し、おしゃれなレストランでは色とりどりの花が食材として使われていますが、花を食する文化は意外と古く、世界各地に存在します。日本の菜の花や蒔の薹、桜、春蘭や菊などを食べる習慣は、既に江戸時代にはありました。調理法は、花びらや蕾のてんぷらや酢の物、和え物が一般的といえるでしょうか。特に桜は花が美しく、香りもあります。桜の花の塩漬けに熱湯を注いで桜湯として用いるほか、お料理やスイーツ、和菓子に使われ、季節感を楽しむことができます。

花には薬用効果や殺菌効果も望めるらしいのですが、そのためかお刺身に黄色い小菊が添えられていることがあります。私は、イギリスから帰国してから長い間、あの小菊が蒲公英だと思いついでいました。蒲公英の葉は欧米でサラダ菜として使いますので、日本では蒲公英の花も食べるのだ、と勝手に解釈。あえて話題に出なかったこともあり、十年くらいは人違いならぬ花違いをしていました。

私たちにとって、花はほろ苦い以外にさほど味があるわけではありませんが、枝がまだ葉に覆われていないこの季節、鳥たちは美味しそうに蜜を吸い、花や新芽を食べています。そして、嘴や顔に黄色い花粉がよく付着していることから、鳥と花の共存関係がわかります。

私は幼い頃から、花の美しい鮮やかな色に誘われて鳥がやってくるものだとずっと思っていました。しかし、人間と鳥では色を同じようには認識しないのです。人間は目にある三つのセンサーが、波長の長さによって赤、緑と青を感じる「三色型色覚」なのに対して、鳥は紫外線の波長を捉える四つ目のセンサーをもっており「四色型色覚」なのだそうです。先日、海外のテレビで鳥の目を通して色がどのように見えるかが映し出されました。一見、雌雄同色に見える鳥の頭には青い光沢があり、単一色に見える花には別の色の模様が浮かび上がりました。私は鳥の写真を撮るために、目立たないと思われる服装で出かけるのですが、彼らにはとてもはつきりとしているのかもしれないね。

人間は育った環境や生活する地域文化などにより色の捉え方が違ってきます。四季折々の草花と光、豊富な水に恵まれた我が国の気候風土から生まれた和色の多くは植物の名前に由来します。桜色や桃色、山吹色、萌黄色など春を象徴する素敵な名前です。ところで、うぐいす餅の鶯色は、メジロの色です。同じ時期に聞こえるウグイスの美しい声が、目立つ羽色のメジロの姿と一緒に重なってしまったのでしょうか。鳥を眺めながら、色の不思議に思いを馳せる、明るく爽やかな季節が今年も巡ってまいりました。有難いことです。

シメ

全長18cm アトリ科

ずんぐりした姿にちよっと怖い目。

西日を浴びながら、カナダカエデの新芽を

食べていた。日本からロシアを経て

ヨーロッパまで分布。わが国では主に

北海道の落葉広葉樹林で繁殖。

青森以南には冬鳥として姿を見せる。